



パチンコ「部品」に愛を込めて

以前一回書いたことがある通り、私はパチンコ関連の販促品などを収集するのが趣味なのですが、一時は置き場所に困って泣く泣くメーカーの紙袋を大量に処分したことがあります。その後も、例えばボックスティッシュの中身を抜いて平らな状態にしたり、ドリンク類の中身を飲んだり捨てたりして軽くするなど、地味ながらコツコツとスペース確保に努めて来ました。

そんな中、雑誌の企画で自分のライター生活25年間に渡る足跡をたどる…といったページを作ることになり、古い写真やら販促品を“発掘”する作業を改めて進めていたところ、90年代頃に主に集めていたユニークな品物が出て来ました。それは、役物にいる人形や盤面の風車、スタートチャッカーなどの、いわゆる「部品」たちです。今でこそ液晶画面の搭載やタイアップが当たり前に行われ、各メーカーのオリジナルキャラも色々と登場していますが、90年代中盤頃までの業界は「キャラクター」というものへの認識が甘く、無名かつ一過性の存在であるのが普通でした。今やファンなら誰でも知っている「夢夢ちゃん」や「マリンちゃん」あたりが浸透して以降、やっと販促品等にキャラたちが登場する流れが定着した…という経緯があります。

私がパチンコに夢中になったのは80年代後半からですから、例えば役モノの中で可愛い仕草を見せる人形に愛着を感じても、入替えすればそれっきり。何とかあの人形たちを身近に置いておけないものか…？ そんなことを悶々と考えていた

ある日、ホールで役物の交換をしている場面に出くわしました。当時はまだ部品交換に厳しい決まりがなく、お願いすると簡単に古い方を譲ってもらえたのです（多少、怪訝そうな顔をされますが…笑）。それを持ち帰り、分解して取り出した人形にキーホルダーのパーツをくっつけると…何と、世界に一つだけのアクセサリーが出来上がったのです！ つまり「なければ自分で作ってしまえばいいのだ」というわけです。

それ以降、ホールでもらったり廃棄台が投棄してある場所から拾って来た部品を収集し、アクセサリー作りや瓶に入れて部屋に飾るなど、自分なりの工夫で沢山の可愛い部品を身近に置くことができるようになりました。そうした活動は民放のTV番組で紹介されたこともあり、ロケスタッフの皆さんと北関東の廃棄台が山積みになっている空き地に行き、私の中から使えそうな部品を抜き取る様子を撮影。その後、私の自宅へ移動してアクセサリーなどを作っている様子を撮ってから、どういう目的でこういうことをやっているかを語る…という流れになっていました。今思えば、ある意味「リサイクル活動」の一環と言ってもよかったかもしれませんが、当時はそんなに格好をつけた理屈は思い浮かばず、正直に「入替えで廃棄されてしまう好きなキャラや可愛い部品などを、身近に置いておきたいからです」と答えていた記憶があります。

その数年後には、野ざらしの廃棄台が一掃されたりキャラクターの販促品が増えたりして、ほとんど部品集めを行わなくなっていました。しかし、演出過多となった現在、再び羽根物やアナログの面白さが見直されつつあります。今こそ原点に立ち返り、見た目や動きで楽しませてくれた役モノや可愛らしい部品の魅力が、再評価されていったらいいな…と願っています。



▲キーホルダーにしたり、ケースに入れても可愛いパチンコの部品たち

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）